小学生の「税についての作文」優秀作品の紹介

徳島県知事賞

みんなの税金でみんなが笑顔

徳島文理小学校 5年

林 明日賀

私と弟は同じ学校に通っています。弟は一年前に入学しました。そんな弟が入学する少し前、しらさぎ大橋を作り始めていました。お母さんと車に乗って、橋をわたっていると、いつもそのしらさぎ大橋が見えます。

「あの橋は、しょうたろうが入学したお祝いのできるんだよ。」

といつも言っていました。しらさぎ大橋を見ていると、少しずつ出来上がっていきます。それを弟は、ここにこしながら見ていました。そして、弟が学校に入学した時、しらさぎ大橋が完成しました。そのしらさぎ大橋と同じように、弟もピカピカ一年生になりました。しらさぎ大橋も真っ白でピカピカです。また、私と弟はバレエに通っていて、家からバレエの教室に行くのに時間もかからなくなり、やったーと思いました。

ある日、私は学校で『税』の大切さについて学びました。すると、おどろくことがありました。それは、弟が入学した時に出来た、しらさぎ大橋が、みんなが少しずつ納めている税金でつくられていたことです。おまけに、建設費用が約三百億円もかかるそうです。私は、ふつうにうれしく思っていたけれど、私が知らない間に税金が役立っていることが分かりました。

「私がうれしいことは、みんなもうれしい」

と考えてみると、私も少しずつ税金を納めていこうと思いました。そうすることで、もっと人々が笑顔になれるような住みよいくらしになるんじゃないかなと思いました。

一人がはらう税金が、みんなの税金で笑顔になれる。だから、

「税金なんていらない。じゃまだ。」

と思うのでなく、

「私たちが幸せにくらせるのも税金のおかげ。」

とあって、みんなに教えてあげようと思います。「少しずつ、納めていこう！税金！」

小学生の「税についての作文」募集（5、6年生対象）は、毎年、徳島県下各単位法人会が中心となって行っている租税教育推進事業で、平成25年度募集では県下全体で1,686点（116校）の応募がありました。

中学生の「税についての作文」優秀作品の紹介

徳島県知事賞

税今昔

県立川島中学校 3年

松岡優佳

私たちは、最後の見切りをつける時や、物事を諦めなければならない時のことを「年貢の納め時」というが、「税金の納め時」と表現することはない。

年貢も税金も租税ではあるが、年貢は、中世・近世を通じ、支配層の主要な財源として位置付けられていた。一方、被支配者層にとっては重い年貢を負担する義務を課され、地方によっては七公三民という過酷な割合で年貢を納めなければならなかったという。

これに比べ、現在の税制は、経済的に恵まれない人たちからむしり取るという制度ではなく、累進課税により税金が徴収され、国民が安心・安全な生活を営むための財源となり、私たちが種々の公共サービスを享受できるというものになっている。だからこそ、国民は粛々と税金を納めているのであって、テレビ時代劇に登場する悪代官の私腹を肥やすために納める年貢とは一線を画していることは言うまでもなく、自分のために納税するという意識が国民一人一人にしっかりと根付いていることが理解できる。

もちろん、最近でも、税金を無駄遣いする官僚や役所が存するという報道を耳や目にすることもあるが、それはごく一部の事例であり、幕府から搾取されたまま絶対返ってくることはない年貢とは異なり、税金は、私たちの生活をより便利に、より豊かにするために還元され、その用途も全てオープンになっている。私がいつも利用している道路、橋、図書館、公園、そして、今通学している中学校の施設や教科書など、税金は私たちの勉強や生活をいろいろな場面で支えてくれている。

江戸時代における村落支配体制としての年貢は、農民など身分の低い者が重労働の末に納めたものであり、その生活は貧困であった。このように自分のやりたいことができなかつた時代は終わり、現在は、税が私たちの勉強やスポーツや夢を後方から支援してくれるようになった。私はまだ納税者ではないが、学校や競技場などの公共施設だけではなく、警察、消防、ゴミの収集・処理のように、私たちの日常生活に密着した仕事の多くが税金により賄われていることを、決して忘れないようにしたい。

今、私は親が納めた税金に支えてもらう立場にある。そして、将来、私が納める税金は、私の子や孫を支えることになる。このように考えると、税金は、お上に「強奪」されるものではなく、国や自治体に「預金」をするのであり、何らかの形で私たちや子孫に返還されるものであると言い換えることができる。

今後、そして未来においても、物事を諦める時期を「税金の納め時」と表現されない時代が続くことを願っている。そのためにも、これから納税者となる私たち自身が、税への正しい認識を深め、国民一人一人が喜んで税金を納めるような社会の実現を目指す必要があると考える。

中学生の「税についての作文」募集は、毎年、徳島県納税貯蓄組合連合会が中心となって行っている租税教育推進事業で、平成25年度募集では県下全体で7,371点（83校）の応募がありました。

中学生の「税についての作文」優秀作品の紹介

徳島県知事賞

助け合い、支え合いの税

三好中学校 1年

村上 和実

今年の四月はとても忙しかった。私は中学校に入学。三才上の姉は高校に入学。その上、両親ともに勤務先が変わり、一家全員が新生活のスタートを切ることとなった。

家族全員が、新しい環境に早く慣れようと必死に頑張っていた頃、祖父が急に入院することになった。両親の帰りが遅いので、祖父がいつも私たち子どもの面倒を見てくれていただけに、祖父の入院はわが家の大ピンチとなった。私も学校のことだけではなく、できる範囲で家の手伝いもした。祖父は、二週間ほど入院をして無事に退院できるようになった。その時、祖父が教えてくれたのだ。「入院したら、ようけお金がかかると思ってたけど、税金のおかげで少しですんでよかったですわ。和実も病院に行っても少ししかお金がいらんのですよ。」と。

私はこの時初めて、税金のありがたさが分かった。祖父の言う通り、私が病院にかかっても一ヶ月・一医療機関あたり六百円までの自己負担ですむそうだ。祖父の入院や治療費を助け、支えてくれた税金に改めて感謝するとともに、税についてもっと深く考えてみようと思い始めた。

小学六年生の時の租税教室で、税金がある世界と税金がない世界のDVDを見たことを思い出した。税金がない世界では、救急車を呼ぶのにも、ゴミ収集車が来るのにも、お金が必要だった。泥棒がいても、つかまえる警察官がいないので、町の治安が悪くなる。火事が起こっても、消してくれる消防車も消防士もいない。税がないと安全で快適な生活ができなくなると改めて思った。

私は、祖父の退院後、税についてインターネットや本で調べるようになった。私たち子どもも納めている「消費税」が一番身近に感じられる税である。その消費税が、二〇一四年に八%、二〇一五年には一〇%に引き上げられるようだ。うわあ、高いなあと思っていたけど、デンマークのように消費税二五%という国もあり、びっくりした。税の負担は大きいのに、世界一幸福な国ランキングの一位だと知り、さらに驚いた。医療、教育、介護などにかかる費用は無料で、国民は自分の払った税金の使い道が目に見えてわかるので、高い税金でも受け入れているということであった。日本には日本の事情があるので、デンマークのまねを全部できるわけではない。しかし、自分たちの納めた税金がどのように使われているのか、むだづかいはないのか、きちんと知って納得する必要があると思う。

私は、税は「助け合い金」「支え合い金」だと思っている。祖父の医療費を助けてくれたように、将来、今度は私がきちんと納税して、助け合い、支え合える社会の一員になりたいと思う。そして、もっと税のことについて学び、税が大切に使われる社会をめざしたいと思う。